

いま手渡したいこと

子どもたちに文化を 教師にあこがれと自由を

前回私は、「子どもの〈声〉を聴き、その悲しみをつかむ」ということについて述べました。これは主として、子どもと関わりとうとする大人の側に視点を置いて述べたものでした。私たちが教師として、指導者として障害などのある子どもたちに関わる際、その関わり方を、「子どもの味方になる」ようなものにしていくためには、子どもたちの示す、時にはことばにならないさまざまな〈声〉に耳を傾け、そのうちに秘められたその子自身の「辛さや悲しみ」を読み取り、さらにその背後にある「本当はこうしたい」「こんなふうに生きたい」という、子どもたちの人間的なねがいをつかもうとするところから始めたい、そんなことを書きました。このことは、教育実践という営みの欠かせない出発点であり、また実践の中で迷いが生じた時、何度でも立ち戻るべき大切なよりどころです。しかし、「子どもの〈声〉を聴きとる」ということは、教師＝大人にとって大切であるだけでなく、

第3回 深く聴きとられることが 育むもの



こしの かずゆき / 1964年生まれ、奈良教育大学教授。専門は障害児教育学。全国障害者問題研究会副委員長、研究推進委員会委員長。著書に『子どもからはじめる算数—すべての子どもに学ぶ喜びを』（共著）（全障研出版部、2017年）など。

奈良教育大学
越野和之

そのことを志向する実践は、それ自体が、子どもたちのうちに、大切なものを育んでいくように思います。

南有紀さんの実践記録から

『障害者問題研究』という雑誌をご存知でしょうか。本誌と並ぶ全障研の機関誌で、障害のある人の権利保障をめぐる諸問題を総合的・多角的に扱う他に類のない雑誌です。この雑誌の「実践に学ぶ」というコーナーに、和歌山県の南有紀さんの報告が掲載されています（「関係者の支え合いの中で育つAくん」『障害者問題研究』第45巻4号、2018年）。

実践記録の主人公は、在宅訪問教育で学ぶ小学部6年生のAくん。南さんはAくんが転校してきた小学部3年生の時から3年間、彼の訪問教育を担当します。Aくんのプロフィールには、溺水事故による低酸素脳症、自発呼吸はなく人工呼吸器による呼吸管理、自分の意思で動かせるのは舌と眼球のみと記されています。健康状態は「比較的安定している」とも書かれていますが、大変障害の重い子どもです。南さんは、「話しかけに口唇・舌をわずかに動かす様子が見られる」という前籍校からの引継ぎを頼りに、話しかけに対してAくんが舌や口唇を動かしたら、その動きを「お返事だね」と意味づけ、そのことをことばにして返すというところから、取り組みをスタートさせます。

訪問がスタートして間もない5月、南さんがAくんの目の前にフェルトの数字を貼ったカレンダーボードを提示すると、Aくんは「突然目を大きく開けて、舌を繰り返し突き出」す姿を見せました。フェルトの数字が一つはずれて、Aくんの胸の上に落ちたのです。そのことに

気づいた南さんは、彼の姿を、「音もなく突然消えたフェルトの数字にびっくり」した、「大慌てでそのことを伝えようとしてくれた」ととらえ、「数字が落ちたの、びっくりした?」「先生に落ちたよって教えてくれた?」とAくんに尋ねます。それに対し、また繰り返し舌を動かすAくん。Aくんのしている動作は「舌を出す」ことだけですが、その限られた動作が、Aくんのどのような心の動きのあらわれなのかを、南さんが的確に「聴きとって」いること、その「聴きとった」ことを、「こう思ったの?」「伝わったよ」とAくんに返すことで、Aくん自身にも、自分の心の動きが南さんに伝わったことがわかり、Aくんが「何を見て」「どう思ったのか」について、共通の理解が成り立ち始めていることがわかります。

このエピソードを通して、Aくんは「見えている」ことをつかんだ南さんは、次に、「積極的に教材を目の前に提示し、選択する機会を設定」するところに取り組みを進めます。絵の具の色、絵本、使う道具など、選択肢二つを目の前に提示して、指さして「こっちにすける?」と尋ね、舌の動きが見られた方を「選んだ」と受けとめて、「こっちにするんだね」と、ここでもAくんの選択をことばで返すようにしていきます。

そんなある日、七夕の短冊に書く願いごとを、お母さんが「元気に過ごせますように」と提案すると、Aくんは「突然全身に力を入れて、舌を繰り返し突き出し、担任の方にぐっと眼球を動か」す様子を見せます。南さんが「どうしたの? 他の願いごとがいいの?」と尋ね、「いろいろなことを体験したい、はどう?」と聞くと、Aくんは「一度しっかり舌を突き出した」そうです。南さんとお母さんは、この時のAくんの姿を、「自分の願いごとを勝手に決めようとした私とお母さんに腹を立